

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



与えられたテーマに対してグループで疑問点を出し合う学生たち。右は土持ゲーリー法一教授、中央は読売新聞の松本美奈専門委員（帝京大学で）（2・3面へ）

巻頭特集

自ら問い、自ら考えるグループワークで社会への関心を喚起

帝京大、京都産業大
立教大など

「ハテナソン」実践広がる 2・3

主権者教育セミナー 高校生・大学生の本音を聞く 4・5

秋田県横手市で「新聞の日」スタート 6・7 新聞使った企業研修始まる 8

学校×企業

明海大×第一生命 御殿山小×読売新聞 9

国際学生科学技術フェアで日本人学生健闘 10

お知らせ・短信 11 リレーエッセー インド工科大学カラグプル校「日本人初の留学生」 12

2016.6

Vol.18



新聞をじっくり読んで質問をつくり、その答えを自分で探す——
米国の住民運動にヒントを得た質問づくりの
グループワーク「ハテナソン」が、教育現場で採用されている。
「社会に関心を持たない若者が増えたら、日本は早晚立ち行かなくなる」
そんな危機感をともに抱く教育関係者と新聞記者が実践している。
先生の質問に答える側から質問を発する側に立場を変えた学生や生徒が、
政治や経済について語り始めた。現場の熱気を報告する。

立教大

「新聞カフェ」でも採用

6月7日、立教大学図書館（東京都豊島区）で開かれた「立教・読売プレスカフェ」もハテナソンの考えに基づく取り組みだ。学生が自主的に運営に参加している。学生が気楽に参加できる「新聞カフェ」形式は、お茶の水女子大学でも近々、始まる。

7日のカフェは、5月24日に続く2回目。松本専門委員を講師に、参加した約20人の学生全員が当日の朝刊を読みながら、自分たちが選んだ「消費税増税延期、賛成？ 反対？」のテーマでハテナソンに興じた。

会場には、消費税増税延期に関する記事と学生による記事の要約が貼り出された。松本専門委員が「新聞と対話するつもりで、質問しながら読む」と面白いですよ」と語りかけると、学生らは貼り出された要約を見たり、手元の新聞をめくったりしながら、次々と質問を書き出し、周りと議論しながら答えを探っていた。

経済学部3年の安藤里紗さんは「消費者として延期はうれしいが、新聞には社会保障にしろ寄せが及ぶと書かれていた。延期賛成派は、少子高齢社会に必要な財源をどうや

って確保できると考えているのだろう」と疑問を口にした。法学部2年の目次奈々さんは「質問を考えながら新聞を読むことで、深く考えるようになり、理解も深まった」と笑顔で語った。

参加者の総意として最後に出したのが、じかに麻生財務相に質問をぶつけるという思いきった提案。学生たちが手分けして、カフェへの出席をかけたことになった。

「質問するほど興味わく」

東京都杉並区立神明中

東京都杉並区の区立神明中学校は「電子新聞部」に「ハテナソン」を取り入れる。同部はこの春、杉山善之校長の肝いりで発足。国語教師として読書指導に力を注いできた元同校教諭の伊藤美佐子さんを指南役に、3年生10人が毎週木曜、質問づくりをし、7月にもインターネット上で発行する創刊号の記事につなげようとしている。

5月19日のテーマは「18歳選挙権は日本を幸せにする」。体育祭の練習を終えて生徒に、伊藤さんが「質問力を磨くために、しっかり記事を読みなさい」と指示を出した。

10分後、次々に質問が飛び出した。「なぜ被選挙権は18歳にならないのだろう」「日本を幸せにするとはどういうこと？」。次々に質問を口にしていった沢田裕登さんは「質問するほど、社会に興味がわく」と笑顔を見せていた。



黒板に疑問点を書き出す神明中の生徒たち

新しいグループワーク
「ハテナソン」広がる

新聞もとに自ら問うことで 社会への関心生む

帝京大

自分の意見を持つ能力養う

「消費税増税をなぜ2年半延期するの？」「給付型奨学金はどうなる？」

6月1日、帝京大学（東京都八王子市）の授業「総合基礎 一般教養セミナー」で、45人の学生が「消費税増税先送り」が私の人生に及ぼす影響」をテーマに、真剣な表情で質問を披露し合っていた。

帝京大の土持ゲリー法一教授と、本社の共同講座。新聞を毎日読み、社会に対する自分の意見を書いたり、発表したりできる能力を身につけることを学習の到達目標に掲げる。



書き出した疑問点を検討する帝京大学の学生たち。中央左は土持教授

「消費増税をなぜ2年半延期するの？」

6月1日、帝京大学（東京都八王子市）の授業「総合基礎 一般教養セミナー」で、45人の学生が「消費税増税先送り」が私の人生に及ぼす影響」をテーマに、真剣な表情で質問を披露し合っていた。

帝京大の土持ゲリー法一教授と、本社の共同講座。新聞を毎日読み、社会に対する自分の意見を書いたり、発表したりできる能力を身につけることを学習の到達目標に掲げる。

「質問する力が、大学での学びや、社会で自分の力を発揮することに必ず役立つ」と松本専門委員は毎週の授業で繰り返す。新聞を読んで浮かんだ疑問点を書き出す「質問シート」を毎日の課題として提出を求め、コメントを添えて返却している。

◆「関心の幅広げたい」

それまで新聞を開いたことなかった学生が、自ら質問をつくり続けることで、社会への関心を深めている。この週は、多くの学生が5月末に実現したオバマ米大統領の広島訪問を取り上げ、「大統領が私人として訪問したら、ど

う考えたか」「アジアの人々の感情がどう変わるのか」といった質問を書きだしていた。経済学部1年の戸田捺貴さんは、「毎回、深く考えさせられる。質問づくりには、まず知識が必要だとわかった。関心の幅をもっと広げたい」と話す。法学部1年の遠藤源月さんは「先生にテーマを出してもらったのではなく、自分でテーマを決めて質問を考えたい」と意欲を燃やしていた。

「知っておくべきだった」

京都産業大

京都産業大学では5月26日、生命システム学科1年の必修「フレッシュヤーズセミナー」で「ハテナソン」が行われた。授業の担当は「ハテナソン」の名付け親、佐藤賢一教授。この日開幕した主要国首脳会議（伊勢志摩サミット）に関する記事を示し、「10分で質問をつくって」と指示を出す。出席した約50人は一斉に記事を読み、質問をつくり始めた。

「そもそもサミットって何するところ？」「ここで決めたことが、世界をどう変えるの？」

サミットについて初めて考えたという西藤圭祐さんは「質問をつくりながら、自分が知っておくべきことだった



新聞を読み、サミットについて考える学生たち

【ハテナソン】

hatenathon

「自ら問い、自ら学ぶ（アクティブ・ラーニング）」という課題にこたえられる新たな教育手法として注目される。「質問づくり」の方法は、米国の住民運動の指導者、ダン・ロズステイン氏が著した『たった一つを変えるだけ』（新評論）を参考にしている。ロズステイン氏は、問いを発することができないために必要な情報と社会的支援を得られない「貧困層の大人を教育する手法として、質問づくりのグループワークを開発した。ハテナソンは、「はてな」と「マラソン」を組み合わせた佐藤賢一・京都産業大教授の造語。

18歳の1票

参院選前に
主権者教育セミナー

7月の参院選で「18歳選挙権」が実現するのを前に、教育現場で求められる取り組みを考える「もうすぐ参院選！18歳の1票 主権者教育セミナー」（読売新聞社主催、文部科学省後援）が6月4日、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれ、高校生や教員ら約100人が参加した。選挙実務に詳しい市町村職員中央研修所客員教授の小島勇人さん（64）らの講演や、若者と政治をつなぐ活動を進めるNPO法人「ユースクリエイト」代表の原田謙介さん（30）が、若者の政治意識について高校生や大学生と意見を交わすパネルディスカッションなどが行われた。



高校生や大学生も交えて活発に意見が交わされたパネルディスカッション

高校生らが政治めぐり活発議論

パネルディスカッションでは、若者の政治意識などについて議論した。

読売新聞の世論調査では、「選挙の投票には必ず行くべきだ」と答えた18、19歳は47%にとどまった。東京都立三田高校3年の相馬達樹さん（18）は「投票は個人の自由で任せるべきだ。投票しないのも『選挙の結果にはすべて賛成する』という意思表示になる」と発言。一方、東京の私立桐朋女子高校3年の畠山佳奈さん（17）は「投票は権利だけど、使わないと、いつか権利を失うことになりかねない」と述べた。

家族と政治の話をするかについては、埼玉の私立開智高校2年の渡辺笙成さん（16）が「話をしようとしても、意見が食い違っていると、あつという間に話が終わってしまう」と実情を語った。

「楽な気持ちで投票を」

若い有権者に、選挙に関心をもってもらうアイデアについても活発に意見が交わされた。

投票率向上に取り組む学生団体「ivote」に所属している一橋大学社会学部1年、藤田

投票に失敗はない

パネルディスカッション



裕樹さん（18）は「出身地の松山市では選挙管理委員会が大学生のサークルなどを選挙啓発の団体として認定し、試合などの機会に他校の学生にも呼びかけてもらっている。『みんなと一緒に投票に行こう』という雰囲気づくりが大事」と強調した。東京都立高島高校3年の井上堅太さん（18）は「候補者は公約のメリットばかり強調するのはなく、デメリットも説明してほしい」と注文を付けた。

は、「若い人は、投票で『良い選択をしなれば』という思いが強すぎる。自分で考えて出した選択で良いという楽な気持ちで投票するべきだと思う」と発

言。原田さんも「投票に失敗はない」と思う。次の選挙の時に前の投票行動を振り返って、また考えればいい」とアドバイスした。

ビラや公報見比べて

講演

市町村職員中央研修所

小島勇人客員教授



18歳らしい視点大切に

トークセッション

原田さんと本紙の渡辺嘉久編集委員によるトークセッションも行われ、政治に対する考えなどについて意見を交わした。

原田さんは「出前授業では、年金のような話ではなく、子育てなど、近い将来の話をするようにしている」と、若者の関心を引く工夫を紹介。また、渡辺編集委員が「政治を知らない自分が1票を投じて、世の中が間違った方向に行くのは嫌だ、という意見をよく聞く」と発言すると、原田さんは「知らなくても、考えることはできる。18歳

には18歳なりの視点が求められる」と応じ、投票の大切さを訴えた。



意見を交換する原田さん(右)と渡辺編集委員

事前の授業で理解深める

開智

桐朋女子

三田

高島

1票の重みから消費増税見送りの賛否まで、パネル討論で活発に発言した4高校の生徒たち。彼らの意識を高めるきっかけとなったのは、渡辺編集委員らがセミナー前にそれぞれの高校で行った出前授業だった。

「国の借金は807兆円。君たち1人当たり638万円の借金があるということだね」

5月18日、開智高校のホールで行われた出前授業。高校2年生364人に向かって渡辺編集委員が説明すると、会場から「え〜」という声があがった。

少子高齢化に伴い増え続ける社会保障費、足元が不安定になる将来を解説し

つつ、それぞれが1票を投じれば未来は変えられると説いていく。

生徒からは「僕の1票で社会が変わるとは思えない」「投票したい候補者がいないときは、どうしたらいいのか」などと意見や質問が相次ぎ、溜剛校長も議論に飛び入り参加。授業後には、生徒から「若者の考えを国会に反映させるため世代別に議席を配分できないか」という提言も飛び出した。

それぞれの高校と打ち合わせを重ねて授業内容も工夫した。桐朋女子高校では子育てをしやすい社会について議論するグループワークを行う一方、都立三田高校では政治や社会への不満を話し合う授



開智高校での出前授業の後、渡辺編集委員(左端)は生徒たちの質問攻めに

業。消費増税の効果が見えない、不透明な政治資金支出に納得できないといった声に対して「では、どうしたらいいのかを考えることが政治参加の第一歩」と渡辺編集委員。

「借金をさらに増やすか、収入に見合った国家にするのか。自分たちが歩むルールは自らの手で敷いていかなければならない」と、投票に行く意義を熱く語りかけた。

秋田県横手市で 「新聞の日」

読み聞かせやデイベート

雄物川小

5月19日朝、横手市立雄物川小学校では全校児童395人に「読売KODOMO新聞」が配られた。同校ではこれまでも、関連のある記事をいくつか画用紙にレイアウトして貼り、感想を書きこむ「切り抜きコンテスト」などに取り組んできた。通常は読書にあてている朝の15分の時間も、毎週木曜日は新聞を読む時間にしており、今年度からは奇数月にKODOMO新聞を全児童に配布している。

1年1組ではこの日の朝の時間、村上智子教諭（54）が沖縄に生息しているヤンバルクイナの紹介記事を使った読み聞かせを行い、児童27人が聞き入った。村上教諭が「道路を歩くヤンバルクイナが車にはねられる事故はなくなりません」とゆっくり読んだ後、児童たちが「事故に遭ってかわいそう」などと感想を発表した。

5年生のクラスでは総合学習の時間に、様々なものの賛成意見と反対意見を募集するKODOMO新聞の連載「対決 キライーダ男爵」のコーナーを活用。「緑茶が嫌い」という男爵の意見に対し、賛成か反対かを決め、その理由を付箋に書いて黒板に貼りだした。

1組の27人からは「熱くて苦い」「緑色で飲む気がしない」という賛成意見や、「苦いのがおいしい」「健康にいい」という反対意見が出た。小西力生君は「他の人の意見が聞けて面白かった。新聞は身近なことが書いてあったためになった」と振り返った。

担任の高橋智恵子教諭（47）は「記事を読んで自分の経験や知識とつなげて考えることができるようになってきた。学びを支える言葉の力を育てられる取り組みを続けたい」と話した。

市立全小中学校に配布、授業に活用

秋田県の横手市教育委員会は、子供たちの言語活動を充実させようと、「新聞の日」を設けた。市立の全17小学校の児童には「読売KODOMO新聞」を、全7中学校の生徒には「読売中高生新聞」を配布して授業などで活用してもらい、NIEの取り組みを深める。初めての「新聞の日」となった5月19、20の両日、市内の各小中学校で新聞を使った学習が行われた。「新聞の日」は5、9月と来年1月の第3木・金曜日。



読売KODOMO新聞
を読んで感想を書く
雄物川小学校5年の
児童たち

本紙記者が読み方指導

横手北中

19日に続き、20日は市内7中学校の全生徒に「読売中高生新聞」が配布され、各中学校でNIE活動に活用された。

横手北中学校では、全校生徒334人に1部ずつ中高生新聞が配布された。同校は、毎週金曜日の午前8時から15分間を「モーニングNIE」の時間に設定しており、記事を書き写して感想を書いている。

生徒たちはラインマーカーで気になったところに線を引いたりして、熱心に中高生新聞を読んでいた。18歳選挙権に関する記事を読んだ2年生の照井大起君は「18歳になると自分も投票することになる。これまで知らなかった選挙のしくみを知ることができてよかった」と話した。

同校では、生徒全員が中高生新聞の「五輪メダリストの金言」仕組み押さえ「清き一票」など四つの記事から興味を持ったものを一つ選択。今後、気になった記事について意見文を書き、同じ記事を選んだ者どうしで話し合っており、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募するという。この後、2年4組（30人）では、秋田支局の名倉透浩デスク



読売新聞秋田支局の名倉デスク(左端)の話を真剣に聞く横手北中学校2年の生徒たち

（43）による新聞講座が開かれた。講座では、新聞が多くの人にチェックを経て作られていることや、社会にとって役立つ情報を記者は時間をかけて取材、執筆していることを説明した。

また、中高生新聞の中から自分が興味を持ったり、友達に紹介したいと思った記事を選んでもらい、その理由を発表

してもらった。新聞を読むポイントについて、名倉デスクは「新聞は興味のない分野でも紙面をめくるだけで目に入ってくる。まずは見出しを眺めることから始めてほしい」と助言した。講座を受けた糸井杏衣理さんは「これまで新聞は見出ししか読まなかったけど、たくさんの方が関わって新聞が作られていることがわかったので、内容もしっかりと読もうと思った」と話した。

「言葉の力」身につけて

横手市の伊藤孝俊教育長に「新聞の日」を設けた
ねらいや具体的な取り組みを聞いた。



横手市教委で制作したNIEの啓発ポスターを手に、「新聞の日」のねらいなどについて語る伊藤教育長

授業に新聞を活用する利点は何ですか。

社会で起きている事象について、新聞記事を読み込み、疑問点を自分たちで調べてみるという作業は、子供たちにとっていい勉強になります。新聞は読み比べができます。さまざまな立場の意見を吸収しながら、自分の考えを深めていくこともできます。これこそ本来の学習の醍醐味でもあり、そういった経験を授業の中に取り込んでいくことで、子供たちの学ぶ意欲がさらに増すのだと思います。

「新聞の日」をどのように生かしていきたいですか。

ものの見方や考え方をどれだけ豊かにしていくか。そして自分はどう考えるのか。これらは、単に授業を受けて身につくものではありません。自ら進んで課題に取り組む「自己教育力」が必要です。その意味で新聞と向き合う習慣をつけることは効果的です。地味で根気のいる作業ですが、「新聞の日」を活用して全ての学校で継続的に取り組むことで、子供たちをサポートし、知識だけに偏らない真の学力を持つ子供を育てていきたいと考えています。

「新聞の日」を設けたのはなぜですか。

新聞と向き合うことで、社会の出来事に関心を深め、さまざまなものの見方、考え方にたくさん触れながら、「言葉の力」をつけてもらいたいと思ったからです。「小中学校の9年間で着実に言葉の力をつけていくことが必要」との考えに立ち、横手市教育委員会では読書活動とNIEに取り組んできました。「新聞の日」という象徴的な日を設けることで、子供たちが活字や社会にさらに関心を持ち、家庭でも会話の話題が増えることを期待しています。

大草薬品と東亜ディーケーケーで相次ぎ

新聞使った
企業研修始まる

新聞を読む習慣を身につけ、社会人としての力をさらに高めてもらうという、読売新聞による企業研修が、大草薬品（本社・神奈川県横浜須賀野、大草貴之社長）と東亜ディーケーケー（本社・東京都新宿区、佐々木輝男社長）で始まった。新聞社の持つノウハウを企業の人材育成などに役立ててもらうため、読売新聞が展開している「新聞のちから」プロジェクトの一環だ。

6月2日に大草薬品で行われた1回目の集合研修では、読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の和田浩二専門委員が「新聞の読み方」を講義した。

目指すもので、20〜30歳代の社員5人が参加した。

新聞を読む効用学ぶ

参加者のほとんどは、「これまでニュースはスマートフォンなどでチェックし、あまり新聞を読んでいなかった」という。和田専門委員は「スマホだと自



大草薬品

新聞をめくりながらニュースを手早くチェックする方法を伝授する和田専門委員

分の関心のあることはクリックするが、ないものはクリックしない」「新聞は、普段は関心のない分野の記事も目に触れ、新たな発見がたくさんある」などと、新聞を読む習慣をつけることの効用を力説した。

続いて、当日の新聞をめくりながら、見出しの大小で記事の重要度が一目で分かる、様々なニュースが一望できるといった新聞の特性を確認していった。

また、ニュース感覚を磨くコツとして、

① 翌日の1面に掲載される記事を手早くチェックする

② 数字を意識して記事を読む

③ 業界の記事に関心を払う

——などとアドバイスした。講義後、参加者からは「これまで食わず嫌いだだった。読み方のコツをつかめばスムーズに読めるようになる気がする。これまでも読んでおけばよかった」「新聞を読みたいとは思わなかったが、世の中の動きは知らなくてはいけない」といった声が

聞かれた。

研修は6か月にわたって実施される。読売新聞から2週間に1度のペースで新聞記事を使ったワークシートや論文などの課題が出され、論文については添削指導も実施する。「文章の書き方講座」や「まわし読み新聞」といった集合研修も予定している。

文章講座、役員も参加

一方、総合計測機器メーカーの東亜ディーケーケーでは5月27日、分かりやすい文章の書き方について、新聞を使った講義が行われた。

佐々木社長はじめ役員や管理職ら約70人が参加し、早乙女大・読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局長が講師を務めた。

講義では、「文章をまとめる」ということは、情報を整理し、知識とともに手際よく並べてみせる技術である」と説明。そのうえで、1面トップ記事を参考に、

① 結論を冒頭にもつてくる
② 冒頭の結論は簡潔にする
③ 主語と述語を一致させる
④ 重複表現を避ける

——など、分かりやすい文章を書く基本を伝授した。



東亜ディーケーケー

幹部社員らを前に、「まずは情報を整理することが大事」と強調する早乙女事務局長

また、情報が整理されていない文章を、その場で書き直す演習も行われ、参加者は情報を整理して書くということを、身をもって体験した。

佐々木社長は「こういう勉強会を催したのは、社員の力を向上させるため」と強調。参加した社員からは、「これまでビジネスライティングの研修は受けたことはあるが、新聞を使った講義は新鮮だった。文章を書き始める以前に、書くべき知識、情報の蓄積が必要だということを感じた」となどと話していた。同社でも引き続き、ワークシートや作文指導などが行われる。

消費者トラブルの回避方法など学ぶ

明海大 × 第一生命

「ライフサイクルゲームⅡ」を楽しみながら、人生設計などについて学ぶ明海大学の学生。中央奥は田中室長

第一生命保険による出前授業が6月8日、千葉県浦安市の明海大学で行われ、寺村絵里子准教授の「人事管理」ゼミに所属する経済学部3年の学生18人が参加した。講師は、同社DSR品質推進部の田中謙二室長が務めた。

学生たちは3〜4人のグループに分かれ、同社が消費者教育用に開発した、すごろく形式のボードゲーム「ライフサイクルゲームⅡ」に取り組んだ。このゲームは、就職、結婚、出産、住宅購入など人生の節目や、病気やけが、消費者トラブルなど



をボード上で疑似体験できるようにになっており、学生たちは楽しみながら人生設計やリスク回避について学んでいた。

ゲーム終了後、田中室長は若い世代が被害を受けやすい、デジタルサイトの「ワンクリック料金請求」や、読者モデルなどに誘う「劇場型モデル勧誘トラブル」の実態などについて説明。「請求されてもお金は払わなくていい」「うまい話は疑ってかかろう」と注意を喚起し、困ったら消費者ホットライン（188）に電話するようアドバイスした。また、第一生命の新入社員採用数や仕事内容などについても紹介した。

寺村ゼミでは就職活動にも役立ててもらおうと、月1回、企業の人と接触する機会を設けており、今回の出前授業もその一環。寺村准教授は「保険、金融業界に対する理解も深めてもらえれば」と期待を込めた。

授業に参加した栗本直弥さん（20）は「人生にはいろんな落とし穴があることがよく分かった。実際の人生ではそうならないよう気をつけたい」と感想を語り、榊原昌樹さん（20）も「ゲームを通じて、生命保険に入るか入らないかがすごく重要なポイントであることに気づいた」と話していた。

5年生が記事の執筆に挑戦

御殿山小

× 読売新聞

次々に手を挙げて、田久保さん（左奥）に補足取材する児童たち。中央奥は保井記者



読売新聞記者と大学生がペアで行う出前授業「ことばの授業」が5月31日、東京都品川区の区立御殿山小学校（藤井英夫校長）の5年生2クラスで行われ、児童51人が記事の執筆に挑戦した。

「ことばの授業」は、千葉大学教育学部の藤川大祐教授が理事長を務めるNPO法人「企業教育研究会」と読売新聞が共同

で開発した2時間のプログラムで、「インタビュアーをしよう」「記事を書こう」「見出しをつけよう」の3種類がある。いずれも教員志望の学生が進行を務め、記者がお手本を示すスタイルになっている。

この日のテーマは「記事を書く」。午前中に行われた5年2組の授業は、読売新聞教育ネットワーク事務局の保井隆之記者と千葉大学教育学部4年の田久保尚さんが講師を務めた。

児童たちには、読売新聞の記者が実際に使用している取材メモ帳が全員に配られ、保井記者が「記号やひらがな、カタカナを使う」などメモのコツを伝授。架空の事件のビデオを上映して、メモを取る練習に取り組んだ。

2時間目には、保井記者が「大切なことから書く」など記事を書くコツを指導。別の内容のビデオを見た後に、児童たちは田久保さんに補足取材し、記事の執筆に取り組んだ。締め切りまで十分しかなかったが、児童たちの原稿用紙はみるみる埋まっていき、講師を驚かせた。



米国で5月に開催された世界最大の学生科学コンテスト「国際学生科学技術フェア」(ISEF)に、昨年の第59回日本学生科学賞(読売新聞社主催)で上位入賞した8組12人が出場した。受賞はならなかったが、世界の舞台に全力で挑み、研究への意欲を新たにした。

日本学生科学賞からISEF 2016に出場した12人の生徒たち

国際学生科学技術フェアで日本人学生健闘

浴衣・法被姿で来場者に説明

ISEFは、米半導体大手のインテルがスポンサーとなり、米国で毎年開かれている。その年のノーベル賞授賞式に招待される「ゴードン・ムーア賞」を頂点に、部門ごとの優秀賞や様々な学会、大学の特別賞があり、注目度は抜群だ。

今年はアリゾナ州フェニックスを会場に、77の国・地域から計1760人が参加。日本からは、セミの後ろ羽の役割を説明して、日本学生科学賞内閣総理大臣賞に輝いた三重県立伊勢高校3年、矢口太一さん(17)らが挑戦した。

日程は5月8～13日の6日間。激烈な競争が繰り広げられる一方、夜は連日パーティーや

International Science and Engineering Fair 2016

Phoenix

出場者の毎日

8 SUN ブース内に研究成果をまとめたポスターを設置。夜はピンバッジ交換会で、世界中から集まった「技術者の卵」たちと交流

9 MON 開会式。富士山や桜を描いたボードを掲げて登壇し、会場を盛り上げる

10 TUE 通訳を交えて英語での最終練習

11 WED 審査会本番。前日までの和やかな雰囲気が一変、生徒たちの表情が引き締まる。約8時間の長丁場

12 THU 一般公開。浴衣や法被を着て、笑顔で来場者に説明

13 FRI 表彰式が行われ、閉幕

イベントが用意され、華やかな雰囲気にも包まれる。

「グラントアワード」と呼ばれる優秀賞は、22の部門ごとに最優秀賞と1～4等が選ばれる。参加した12人は本気で入賞を狙っていただけに、受賞を逃して、式典終了直後には涙ぐむ姿も。矢口さんは「悔しい。これまでISEF出場が夢だったが、今度は入賞が夢になった」と再挑戦を誓った。一方、埼玉県立浦和一女高校の岡部七子さん(17)は「楽しかったけど、自分の無知さを感じた。大学で知識を深めたい」と先を見据えていた。

中学の部からも初出場

今回のISEFには、中学の部の優秀作品からも初めて派遣

された。昨年12月の派遣決定時点で、京都・桃陵中学3年だった早川優希さん(15)(現・京都市立塔南高校1年)だ。出国までは苦難の連続。2月に高校入試があり、登録書類の作成や研究作品の英訳など、準備は思うように進まなかった。語学力も大きな壁で、受験後は大学教授や地元の青少年科学センターの教諭らの力を借り、慣れない英語での発表、質疑応答練習に明け暮れた。努力の甲斐あって、本番では自信を持って発表できた早川さん。受賞に届かず「今までで一番悔しい」と話すが、「新たな研究テーマに取り組んで、世界大会という最高の舞台でリベンジしたい」と大きな刺激を得ていた。



法被姿で研究内容を説明する矢口さん

全国学生英語プレコン 参加者募集

英語で企画発表(プレゼンテーション)ができる人材育成を目指す「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」(主催・神田外語グループ、読売新聞社)の第5回大会が12月3日(土)、東京都千代田区の神田外語学院およびイノホールで開かれます。対象は全国の大学、大学院、短期大学、高等専門学校、専門学校の学生です。

テーマは次の3つです。

- ①インバウンドを地方に! 体験型ツアーを提案
- ②日本の防災・減災ノウハウを世界にアピール!
- ③海外向けにひと工夫! 製品アイデアを売り込め

審査員は、日本英語交流連盟会長で元駐カナダ大使の沼田貞昭氏ほかで、最優秀賞受賞者(1人または1組)には、奨学金100万円が授与され、読売新聞の英字新聞「ジャパン・ニューズ」が6か月間届けられます。応募締め切りは、個人の部10月19日、グループの部10月20日です。応募はウェブサイトからお願いします。 <http://www.kandagaigo.ac.jp/contest/>



「全国高校ビブリオバトル」 参加者募集

高校生がお薦めの本の魅力を発表し、聴衆の多数決でどの本が一番読みたくなったかを決める「全国高等学校ビブリオバトル2016」が7月に開幕します。来年1月8日に東京のよみうり大手町ホールで開かれる決勝大会の出場権をかけて、高校生たちが熱いトークを繰り広げます。

活字文化推進会議が各地の大学の協力を得て開催するブロック大会は、7月23日に松山市で行われる四国大会からスタート。北陸、東北、関東甲信越、中国など計9大会(表参照)が順次行われます。

ブロック大会への出場者は各校1人。校内での予選を勝ち抜くか、学校長推薦が必要です。参加希望者は、

- ①参加希望のブロック大会名 ②学校名、学年 ③代表生徒名(ふりがな)
- ④紹介する本、著者、出版社 ⑤担当教諭(司書) ⑥電話番号

を明記の上お申し込みください。発表者決定が遅くなる場合は、学校名だけの仮エントリーも可能です。一般の観戦者も申し込み必要。

■申込先 読売新聞東京本社 活字文化推進会議事務局

FAX (03・3217・4309) メール (bib@yomiuri.com)

■問い合わせ 同事務局 ☎03・3217・4302 (平日10:00~17:00)

一方、都府県大会は県教委、全国高等学校文化連盟、全国学校図書館協議会などが主催します。大会の詳細は、21世紀活字文化プロジェクトのウェブサイトを参照してください。

<http://katsuji.yomiuri.co.jp/>

ブロック大会			
大会名	対象都道府県	日程	会場
北海道	北海道	10月 2日	北海道大学
東北	青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島	9月 4日	東北大学・カタールサイエンスキャンパス
関東甲信越	茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨・新潟・長野	9月18日	大正大学
東海	岐阜・静岡・愛知・三重	9月25日	椋山女子学園大学
北陸	富山・石川・福井	8月 7日	石川県政記念いのき迎賓館
関西	滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山	11月 6日	関西大学梅田キャンパス
四国	徳島・香川・愛媛・高知	7月23日	松山東雲女子大学
中国	鳥取・島根・岡山・広島	9月22日	広島経済大学
九州山口	山口・福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄	11月13日	西南学院大学

都府県大会

東京都、神奈川県、埼玉県、大阪府、秋田県、和歌山県、岡山県、徳島県、鹿児島県など

丸の内キッズジャンボリー 「こちら親子新聞編集室」も実施

8月16~18日開催

小中学生とその家族を主な対象にした、楽しく学べる参加体験型イベント「丸の内キッズジャンボリー」(主催:東京国際フォーラム、共催:読売新聞社)が8月16~18日、東京・丸の内東京国際フォーラムで開かれます。

ワークショップ形式のうちわ作り教室や、日本の木を使った工作コーナーのほか、大学教授による夏の特別授業などが行われます。

18日に読売新聞が実施する「こちら親子新聞編集室」では、新聞の記事や写真を切り貼りして、世界で一つだけのオリジナル新聞を作ります。現役の記者が、レイアウトや見出しのつけ方など、新聞作りのコツを教えます。夏休みの宿題に役立つヒントが満載です。

どの日も午前10時から午後5時。参加無料。一部プログラムは、事前の申し込みや当日の整理券が必要。詳細はウェブサイト <http://www.tif-kids.jp/2016>



■問い合わせ
丸の内キッズジャンボリー事務局
☎03・5221・9630

昨年のジャンボリーで消火活動を体験する子どもたち

「よみうり入試必勝講座 with代々木ゼミナール」公開中

読売教育ネットワークのウェブサイトでは、読売新聞とジャパン・ニューズの記事を使った小論文と英語の講座「よみうり入試必勝講座with代々木ゼミナール」を無料で公開しています。代ゼミの講師陣が問題を作成、解説。18歳選挙権やスマホ依存、女性の活躍など最新の時事問題を取り上げています。

2016年度大学入試では、読売新聞とジャパン・ニューズの記事からの出題が143大学・短大、229件あり、小論文や英語の問題にも多く使われました(6月10日現在)。小論文は毎月1日、英語は毎月15日の更新。新聞にも親しめて、小論文と英語の対策にもなります。ぜひ活用ください。
<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/hissho/>



海外で学ぶ・リレーエッセー ⑱

インド工科大カラグプル校 「日本人初のインド工科大学生」

灘高校（神戸市）卒、インド工科大カラグプル校3年

下西啓一郎さん



大学寮で友人と。下西啓一郎さん（左から2人目）＝本人提供



インドで工学系大学への進学を希望する学生はみな、インド工科大（IIT）への進学が夢だ。インド工科大カラグプル校は16あるインド工科大の中でも、その名声と成功の歴史、高度の教育、著名な卒業生たちを輩出した実績、そして学生生活と競争の熱心さでよく知られている。

才能や熱意がある学生や教授陣との交わりは有益だ、とも思っていた。日印間での産学連携の強化も注目されてきており、こうした流れに身を置きたかった。これまでのところ、私と話した人はみな驚き、そして遠路日本からの留学を喜んでくれていると感じている。

私は農業食品工学部に在籍している。エネルギーや資源について学ぶことに興味がある。農業は人類にとつて必須なものだ。1、2年次の学生の教科は力学、物理学、化学、数学など工学系の共通科目とこれらの科目に関係して理論をよりよく実践的に理解するための基礎実習がほとんどだ。

教科は多くが講義形式で、これで基礎理論を学ぶことができる。それは応用工学やより深い研究を進めるのに必要だ。学生たちは、レベルが高くて、タフだ。毎年、16校に計130万人が受験してわずか1万人しか、合格しない。

「献身的な国家への奉仕」——国家への奉仕の精神がわれわれのモットーだ。この精神に基づいて、学生たちはボランティアのユニットを組織して、生活や教育の質を改善するために村々や学校を訪問する。年に1回、12月にボランティアのキャンプが設営され、インフラが整備されていない村へ行き、道路の建設を行う。レンガを細かく砕いて持つて行き、歩道にまく、そして足で踏みつける……すべての仕事は手作業だ。村への貢献もさることながら、このような手作業を経験するのにもまた楽しい。国に貢献することに熱心で喜びを見いだす学生が多く、この精神には感心する。

カラグプルでの経験は、偉大な友達と教授陣とのやる気にあふれたかけがえのないものだ。それが好きだ。（会報編集部抄訳 The Japan News 2016年1月1日）

インド工科大カラグプル校

1951年に開校。16校ある国立のインド工科大学のうち最も古い。19学部に7000人の学生がいる。卒業生に米グーグルのサンダー・ピチャイCEOなど。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

英語の原文は <http://the-japan-news.com/news/article/0002838139> でお読みいただけます。